

# ニタリクジラ 北西太平洋

Bryde's Whale, *Balaenoptera edeni*



(C) 日本鯨類研究所

## 管理・関係機関

国際捕鯨委員会 (IWC)

## 最近の動き

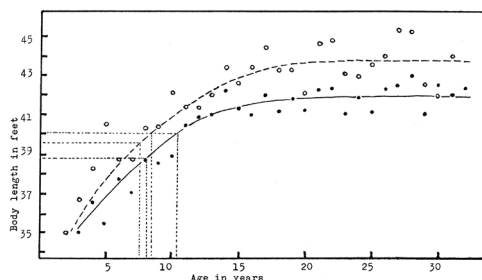
本種をめぐる大きな動きはない。なお、IWC 科学委員会では、北西太平洋の本種（西部北太平洋系群）を対象とした 2 回目の改訂管理方式 (RMP) 適用試験を 2017 年より開始する予定である。

## 生物学的特性

- 体長・体重：12～15 m・20～25 トン
- 寿命：約 60 歳
- 成熟開始年齢：7～10 歳
- 出産期・出産場所：冬を中心・低緯度海域
- 索餌場：中低緯度海域
- 食性：オキアミ、魚類
- 捕食者：シャチ
- その他：近年、本種を *B. brydei* と *B. edeni* の 2 種に分類する研究が報告されている。分類が確定した場合、西部北太平洋系群は *B. brydei* に相当（東シナ海系群は *B. edeni*）。

## 利用・用途

刺身、鯨油など



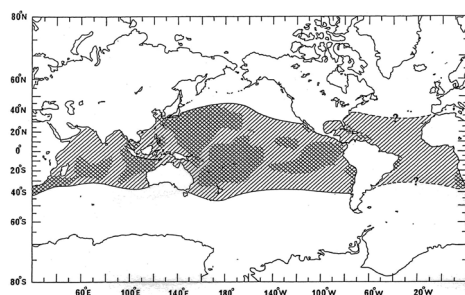
西部北太平洋系ニタリクジラの成長曲線

## 漁業の特徴

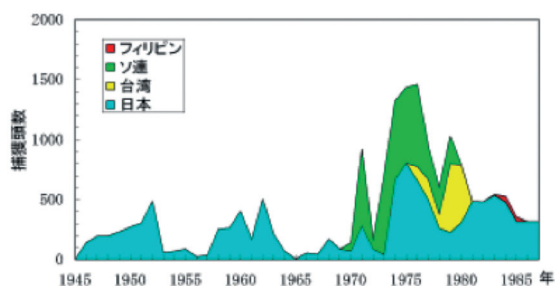
本種は我が国沿岸で 17 世紀（江戸時代）から古式捕鯨（網取り式捕鯨）で捕獲されていた記録があるが、19 世紀末に近代捕鯨（捕鯨砲による捕獲）が開始され、西部北太平洋系群を含む本種の捕獲が、三陸、和歌山、小笠原諸島近海を主漁場とした沿岸捕鯨によって、商業捕鯨モラトリウムへの異議申し立てを取り下げる 1987 年まで行われた。また沖合域では、第二次大戦後、我が国（1946～1952 年及び 1971～1979 年）と旧ソ連（1970～1979 年）が母船式捕鯨を実施し西部北太平洋系群を捕獲した。この他に、台湾（1976～1980 年）とフィリピン（1983～1985 年）でも散発的に沿岸で同系群を捕獲した記録がある。1988 年以降、全ての海域で商業捕鯨は停止されたが、我が国は 2000 年から第二期北西太平洋鯨類捕獲調査（JARPN II）を開始し、以降、沖合域で同系群の捕獲を継続して行っている。

## 漁獲の動向

西部北太平洋系群は、我が国では 1946～1987 年の沿岸捕鯨で、およそ 7,100 頭（年平均 170 頭）、母船式捕鯨で 1946～1952 年に約 1,300 頭（年平均 190 頭）、1971～1979 年に約 2,700 頭（年平均 300 頭）を捕獲した。この他に、旧ソ連が母船式捕鯨で 1970～1979 年に約 4,100 頭（年平均 410 頭）、台湾が沿岸で 1976～1980 年に約 1,500 頭（年平均 290 頭）、フィリピンが沿岸で 1983～1985 年に約 100 頭（年平均 30 頭）を捕獲した。2000 年以降の我が国の捕獲調査（JARPN II）では 2013 年まで年間 50 頭の捕獲上限のもとに総計 655 頭（年平均 47 頭）を捕獲したが、2014 年に国際司法裁判所の「南極における調査捕鯨」訴訟判決に照らし、調査目的を限定するなど規模を縮小して実施することとなり、捕獲上限を 25 頭とし、同年は上限 25 頭を捕獲した。なお、本種は 1940 年代末に新種と識別されるまでイワシクジラと同種として扱われていた。日本の捕鯨統計で両種が区別されたのは 1955 年からであり、1976 年から IWC においてもニタリクジラとして独立に漁業管理されている。



ニタリクジラの分布域（網目は主分布域）



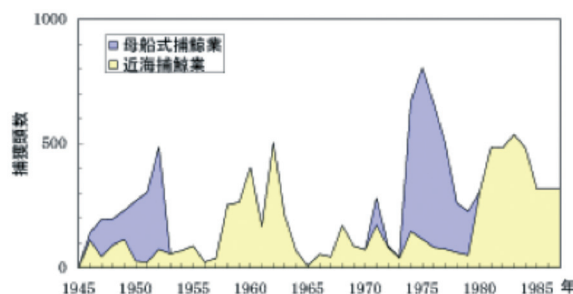
西部北太平洋系ニタリクジラの国別捕獲量の年推移

## 資源状態

1996 年の IWC 科学委員会において西部北太平洋系群の包括的資源評価が行われ、1996 年当時の成熟した雌の資源水準が同初期資源量の 60～80% であり、Hitter モデルによる資源動向予測により近年増加していることが合意された。これらの結果から、本系群の資源水準は中位から高位にあり、資源動向は増加中であると判断される。

## 管理方策

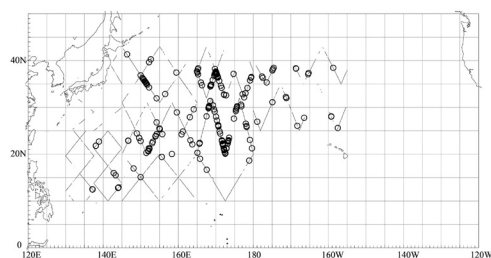
IWC の新管理方式 (NMP) が 1976 年より北太平洋で適用され、西部北太平洋系群は初期管理資源に分類され商業的に利用されていたが、商業捕鯨モラトリアムにより 1987 年漁期を最後に捕獲停止となった。その後、不確実性の下でも資源を安全に管理できる数々の安全策が組み込まれた、ひげ鯨類のための RMP が 1993 年に完成した。本系群については、IWC 科学委員会で、1996 年に包括的資源評価を終え、2005～2007 年に第 1 回目の RMP 適用試験が実施され、3つの管理オプションと 1つの調査条件付き管理オプションが了承された。また 2008 年の同委員会では、RMP による捕獲枠算出に使用する 2000 年時点での資源量について 20,501 頭 (変動係数 33.6%) として合意した。その後も、日本・IWC 共同北太平洋鯨類目視調査プログラム (POWER 計画) などの調査によって、引き続き、本種を含む鯨類の目視データ収集等が続けられていることから、それらによる情報の更新を取り込んで、2 回目の RMP 適用試験を 2017 年に開始することが第 65 回 IWC/SC 年次会合 (2014 年) で合意された。なお、北西太平洋で我が国が実施している捕獲調査についても、2017 年に IWC 専門家パネルによるレビュー会合が予定されており、それらの成果も今後の RMP 適用試験に貢献することが期待される。



日本における西部北太平洋系ニタリクジラの漁業別捕獲量の年推移



トッパバルを有する鯨類目視調査船



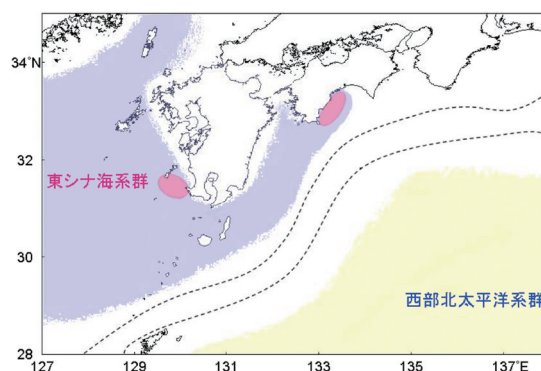
目視調査を実施した航跡と西部北太平洋系ニタリクジラの発見位置 (1998～2002年8・9月)

## 資源評価のまとめ

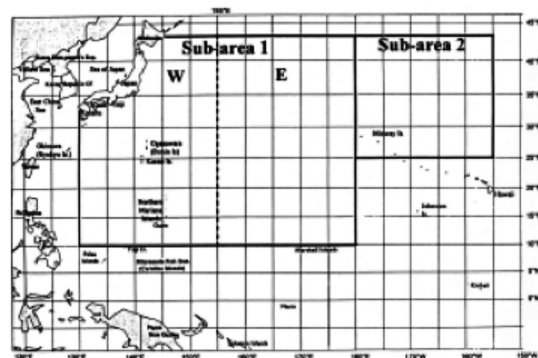
- IWC で合意された資源水準は初期資源量の 60～80% であり中位から高位。
- Hitter モデルによる資源動向予測は増加。

## 管理方策のまとめ

- 1976 年に IWC の NMP を適用。
- 商業捕鯨モラトリアムにより 1987 年漁期を最後に捕獲停止。
- 1993 年にひげ鯨のための RMP が完成。
- 1996 年に IWC は包括的資源評価を終了。
- 2007 年に RMP の適用試験が終了。
- 2008 年に IWC は捕獲枠を算出する資源量を合意。
- 2017 年に再び RMP 適用試験に向けたレビューが開始される予定。



日本周辺におけるニタリクジラ 2 系群の分布



IWC による西部北太平洋系ニタリクジラの管理海域

## ニタリクジラ (北西太平洋) の資源の現況 (要約表)

資源水準	中位から高位
資源動向	増 加
世界の捕獲量 (最近 5 年間)	な し (商業捕鯨モラトリアムが継続中)
我が国の捕獲量 (最近 5 年間)	2014 年は捕獲調査により年間 25 頭
最新の資源評価年	2007 年
次回の資源評価年	2017 年